慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	アイユーブ朝とシシリー : サラディンとシシリー
Sub Title	The Arrubids and Sicily (I)
Author	湯川, 武(Yukawa, Takeshi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1971
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.44, No.1 (1971. 11) ,p.89- 95
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集東西交渉史
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19711100-0089

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アイユーブ朝とシシリー

サラディンとシシリー

湯川　武

(一)

アイユーブ朝に先だつファーティマ朝は、政治・商業・文化の各方面で、シシリーと密接な関係をもっていた。たとえば、商業上の両者の深い関係は、Goitein のゲニザ文書研究からも明らかである。シシリーにおけるムスリムの支配が終ったのちも、この関係は維持され、特に文化的・商業的関係は密接であった。

しかし、十字軍の出現、ファーティマ朝の没落、サラディン[1]の抬頭などの要因が、両者間の関係に深刻な影響を与えた。サラディンは、ファーティマ朝の没落後、まずエジプトにおいて権力を握り、続いて Nūr al-Dīn b. Zangī の死後は、シリア・パレスティナ方面の支配権を得て、十字軍勢力に対抗するムスリム側の指導者となった。すなわち、十字軍にとって最大かつ直接の敵となったわけである。

サラディンがエジプトで、事実上、権力を握ったのは一一六九年であるが、スルタンとなったのは一一七一年である。これに対し、シシリー王国では、一一六六年にウィリアム二世が即位している。ウィリアム二世の治世は一一八九年まで続くから、ほぼサラディンの治世と一致する。このウィリアム二世は、その父のウィリアム一世の政策を受け継ぎ、ローマ法皇を支援し、反神聖ローマ帝国の態度をとった。[2] ウィリアムは十字軍運動にも、当然、熱心であった。しかし、彼は単なる十字軍支持者であるだけでなく、その政策の基調は領土拡大主義であったといえよう。Chalandon によれば、ウィリアム二世が、艦隊をムスリムの領域に派遣したとき、彼はシシリーの貿易のことや、ヨーロッパと聖地との連絡の安全確保のことだけを考えていたのではなく、レバントにおける全キリスト教徒の保護者たらんという野心をもっていたのであるという。[3]

註

(1) 正しくは Ṣalāḥ al-Dīn であるが、慣用にしたがい本論では

アラビア語文献引用の場合も「サラディン」と書くことにする。

(2) Chalandon, F., "Chapt. 8 (B) The Norman Kingdom of Sicily," in the Cambridge Medieval History, vol. 5. p. 198. 1964 (Cambridge).

(3) ibid. pp. 199-200.

(二)

ウィリアム二世が、サラディンの敵として、最初にアラビア語史料に現れるのは、一一七四年である。一一七四年七月二五日にシシリー艦隊がアレクサンドリア沖に現れた。(1) Gibb は、このシシリー艦隊については、すでにコンスタンティノープルより警告を受けていたために、サラディンはイェルサレム王国の Amarlic 王のシリアにおける作戦行動を知りながら、動くことが出来ずエジプトに止っていた、と述べている。(2) この遠征に関して、ビザンチン皇帝 Manuel はウィリアムに援軍を送ろうと申し出たが、他の原因による両者間の不和のために、ウィリアムはこの申し出を断っている。(3) このような事情から察すると、Gibb の述べているように、ビザンチンがサラディンに警告を与えたということも考えられるが、Ibn Wāṣil Abū Shāma Ibn al-Athīr などは、この点については何も述べていない。(4) 一方、イタリー諸都市とサラディンの間の友好関係は、サラディンが前もって、シシリー艦隊の来攻を知っていたという説を支持する。いずれにしても、シシリー艦隊がアレクサンドリア沖に現れたときには、サラディンはカイロに滞在していた。(5)

シシリー艦隊の構成については、各史料に多少の異同が見られるが、船舶の数、兵員数などには誇張が見られるようである。(6) シシリー軍は上陸後、アレクサンドリアを攻撃したが、この攻防戦に関しては、Ibn al-Athīr Abū Shāma Ibn Wāṣil がほぼ一致した記事を残している。この三人のうち、Abū Shāma は、はっきりと出典は al-'Imād al-Kātib であると述べており、Ibn Wāṣil も同じく al-'Imād を引用していることは明らかである。al-'Imād al-Katib がサラディンに仕えるようになったのは、もう少し後のことであるが、史料としての信頼度はきわめて高いものであることは、広く認められている。(7) これらの史料によ

れば、上陸後シシリー軍は攻城器などを使ってアレクサンドリアを攻めたが、守備側の抵抗に遇い、その上、サラディンの送った援軍が近づいていると知り、三日目で攻撃を放棄し、艦隊はアレクサンドリアを離れた。

このシシリー艦隊のアレクサンドリア攻撃の理由としてIbn Wāṣil は次のように述べている。(8)「このシシリーからの艦隊の派遣の理由は、エジプト人がシシリー王及び他のフランクに、エジプトに攻めて来るように、と手紙を書いたためである。シシリー王は、サラディンが手紙を書いた者たちを捕えたのを知らずに、この艦隊を派遣した。」Ibn al-Athīr はこの点についてさらに詳しく述べている。(9) 彼によれば、シシリー艦隊のアレクサンドリア攻撃は、カイロにおける反サラディン勢力の陰謀と関係がある。サラディンは熱心なスンニ派の信奉者であり、バグダードのアッバース朝カリフの支持者であったが、これに対し、シーア派を奉ずるファーティマ朝の残存勢力は、サラディン政権の転覆を計り、外部からの援助を、シシリー王やシリアのフランクに頼んだ。そしてその代償として金や土地を割譲することを約束した。しかしこの計画は未然に発見され、首謀者 'Imāra b. Abī al-Ḥasan 以下主たる者は捕えられ、処刑されてしまった。

このように、反サラディン陰謀とシシリー王との関係ははっきりと Ibn Wāṣil と Ibn al-Athīr とによって指摘されているが、他の同時代の史料には何も述べられていないのは不思議である。Ibn Shaddād Ibn Abī Tayy も al-'Imād al-Kātib もまた後代の Abū Shāma も Maqrīzī も、シシリー王とこの陰謀との関係については何も述べていない。しかしサラディン打倒の計画者たちが、フランクと連絡をとったということは、Ibn al-Athīr Ibn Wāṣil 以外の者も認めているので、シリアの十字軍諸国、諸侯と何らかの連絡をとったことは確かであろう。問題はこの「フランク al-Firanj」という語を広義に解釈して、その中にシシリーも入っていると考えてよいかどうかである。もし確かに、この陰謀とシシリー国王が関係あるとしたら、ファーティマ朝とシシリー・ノルマン王朝の関係は非常に深く、ファーティマ朝の没落後も、何らかの信頼すべき連

絡の経路をもっていたということになる。

註

（1）ヒジュラ暦では五六九年 Dhu'l-Ḥijja 二三日。この日付については史料により多少の違いが見られる。

（2）Gibb, H. A. R., "Chapt. XVIII The Rise of Saladin" in A History of the Crusades, ed. by Setton, vol. 1, p. 566, 1955 (Philadelphia).

（3）Runciman, S., A History of the Crusades, vol. 2, p. 403, 1952 (Cambridge).

（4）al-'Imād al-Kātib は、この艦隊のニュースについてはすでに広まっていたとだけ述べている。—Abu Shāma, Kitāb al-Rawḍatayn, vol. 1 pt. 2, p. 598, 1962 (Cairo).

（5）Ibn Shaddād, tr, by C. W. Wilson, Life of Saladin, p. 67, 1897 (London). Runciman, vol. 2, p. 403.

（6）例えば、兵員について、Ibn al-Athīr は五万人といい、Abū shāmā は三万人といっているが、これは明らかに誇張されている。

（7）アイユーブ朝時代の歴史記述については Historians of the Middle East, ed. B. Lewis & P. H. Holt の中の "Some Notes on Arabic Historiography during the Zengid and Ayyubid Periods" "The Arabic Historiography of the Crusades" を参照。

（8）Ibn Waṣil, Mufarrij al-Kurūb, vol. 2, pp. 11–12, 1957 (Cairo).

（9）Ibn al-Athīr, al-Kāmil fi'l-Tārīkh, vol. 9, p. 123, 1967 (Beirut).

（三）

一一七四年の接触以来、サラディンは Nūr al-Dīn b. Zangī 死後のシリア統一及び十字軍との戦いに忙しく、一方ウィリアム二世は一一八三年のコンスタンティノープル征服計画に見られるように、ビザンチンとの衝突に精力を費し、[1] 両者がエジプトないしは、シリア・パレスティナで接触するということは、一一八八年に至るまでなかったといえる。

すでに一一八八年までに、サラディンはイェルサレムを奪還し、十字軍をシリア沿岸のトリポリと Ṣūr (Tyre) を中心とする狭い地域におしこんでしまっていた。一一八八年に入ってもなおサラディンの活動はやまず、トリポリ、Ṣūr などの主要な都市を直接攻撃せず、その周辺の地域を順次陥落させて、十字軍を孤立化させる作戦をすすめていた。

一一八八年五月にサラディンは一旦ダマスカスに戻り、短い滞在ののちに、直ちに沿岸地方へと進んだ。Anṭarṭūs (Tartosa, Antarsus) を攻略したのち、サラディンはさらに北上し Marqīyya から Jabala を目指して進んだ。(一一八八年五・六月)[2] この Marqīyya から Jabala への進軍の途中で、サラディン軍は再びシシリー軍と衝突することになった。

それより前に、ウィリアム二世は、一一八七年のイェルサレム王国崩壊と、十字軍の窮状を憂い、他のヨーロッパの君主たちに、新たな十字軍をおこすようにと誘いかけ、また彼自身は、直ちにビザンチンと和解して、キプロス海域に居るシシリー艦隊をトリポリに派遣することにした。この艦隊は Margaritus に率いられており、三百人の騎士を乗せていた。[3]

Lane-Poole は、サラディンはダマスカスから一旦トリポリに向ったが、この地が、このシシリー艦隊によって補強されており、攻略するには時間がかかると見たので、トリポリを離れ北上した、と述べている。[4] 彼はヨーロッパ史料を使って上のように述べているが、アラビア語史料は、このトリポリにおけるシシリー艦隊について、全く逆の評価を下している。al-'Imād al-Kātib[5] も Ibn Wāṣil に引用されている Ibn Shaddād[6] も一致して、「トリポリに来たシシリー艦隊は何の役にも立たなかった。」と述べている。この点ではアラビア語史料に誇張があるようである。というのは、シシリー艦隊がトリポリで何の役にも立たなかったということは、サラディン軍がトリポリに攻撃をしかけたが、その時、何の役にも立たなかったと解釈出来る。しかし両者とも、サラディンがこの時に、トリポリを攻撃したとは一言もいっていない。これらの諸点から考えるとトリポリにシシリー艦隊の救援部隊が来たために、サラディンはトリポリ攻撃を一時撤回して、他の比較的弱い所へ向う作戦をとったのであろう。そうするとシシリー艦隊はサラディン軍と衝突しなかったにもかかわらず、充分に救援軍としての役目を果したということになる。

その後、この艦隊は一度 Ṣūr に行き、またトリポリに戻ってきていた。[7] そこへ北上中のサラディン軍が Hospital-

lers の守る al-Marqab 城を攻撃するという報が入り、再び救援に来た。al-Marqab におけるフランク側の頑強な抵抗については Ibn Shaddād も al-'Imād al-Kātib も共に記録している。しかし、サラディンは苦戦を強いられはしたが、防衛線を破り Jabala へと達し、そこを十字軍から奪い返した。

註

(1) Chalandon, p.199. Runciman, vol.2, pp.428-429.
(2) al-'Imād al-Kātib, al-Fatḥ al-Qusī fī'l-Fatḥ al-Qudsī, p.121 以下 1888 (Leiden).
(3) Runciman, vol.3, p.4.
(4) Lane-Poole, S., Saladin, p.245, 1964 (Beirut).
(5) al-'Imād al-Kātib, op.cit., p.134.
(6) Ibn Wāṣil, vol.2, p.257.
(7) ibid., p.584. Ibn Shaddād を引用している。
al-'Imād al-Kātib, p. 135.

(四)

この al-Marqab での接触が、サラディンとシシリー軍の最後の接触となった。第三十字軍に熱意を燃やしていた

ウィリアム二世は一一八九年十一月に死去し、その後シシリーは政治的混乱におちいり、ウィリアム二世のあとを継いだ Tancred は、南シシリーにおけるムスリムの反乱、キリスト教諸侯の介入などに対抗するため、シリア沿岸から艦隊を引きあげざるを得なかった。そして、その後は Hohenstaufen 家が、シシリー王位継承に介入してきて、事態は一層混乱するばかりであった。そして一一九四年には、神聖ローマ皇帝のヘンリー四世がシシリー国王を兼ね、ここにノルマン王朝は終りを告げた。

一方、サラディンは、第三十字軍の到来により、新しい情勢に直面しなければならなかったが、一一九二年に、第三十字軍と講和を結んだのち、一一九三年に死んだ。

サラディンは、シシリー国王とは、一度も政治的交渉をもたずに終ったが、これはサラディン時代のアイユーブ朝の基本的な性格をよく表わしている。

サラディンの功績は、特に一一八六年に至るまでの時期において、分裂状態にあったシリア・パレスティナ及びエジプトなどの地域を、一つの共通の目的をもって統一しえ

たということであり、彼の軍事的成功は、このことを無視して、彼の軍事的な指導者としての能力という点だけで論ずることは出来ない。また、十字軍そのもののもつ基本的な脆弱さが、彼の軍事的成功を助けたという点も見落せない。(1)

かくの如き、サラディンの歴史的評価は、ごくわずかのシシリーとの関係の中にも、はっきりと読みとることが出来る。シシリー艦隊のアレクサンドリア攻撃失敗も、フランク内部での連絡の悪さ、またサラディンがすでに、それに呼応すべき内部の反サラディン勢力を刈りとったことにその原因がある。またラテン諸国とビザンチンとの関係もサラディンにとって有利に作用していたことも、このアレクサンドリア攻撃の失敗の例の中に見い出すことが出来る。

サラディンとシシリー軍の接触を論じている、アラビア語史料は、現場での証人の記録が残っているために、信憑性の高いものであるが、時として、サラディンの功績を讃えんがためか、誇張があるように見られる。そして記事の量が、比較的少ないのは、サラディンの直接の敵は、シリア・パレスティナの十字軍諸国であり、シシリーとは実際に接触が少なかったのであるから、この点に関しては、歴史家たちは公平だったといえよう。

最後に本論では、サラディン時代のシシリーとの通商関係については全く論じなかったが、この点を明らかにすれば、サラディンの基本的な政策が一層はっきりするであろう。

また、サラディンの死後、アイユーブ朝はその政策に重大な変更をもたらし、一方、シシリーの側でも、ノルマン王朝が亡びるに及んで、その基本的性格を変えた。サラディン以後の、アイユーブ朝とシシリーの関係は、al-Malik al-Kāmil とフリデリック二世の関係によって代表されるといえようが、これについては稿をあらためたい。

註

(1) サナディンの評価については H.A.R. Gibb の "The Rise of Saladin" (Chapt. XVIII, A History of the Crusades vol. I) を参照。